

知求会ニュース

2024年12月

第92号

◎ 着任おめでとうございます！

梁鎮輝さん（博士後期課程国際学研究専攻第11期修了生）が2024年10月1日付で国際学部に着任されました。修了生で初めての着任ですが、今後のご活躍を祈念しています。

◎ 掲載記事紹介

1. 放送大学栃木学習センター『とちの実 10月号 No.134』（令和6年10月）2面に、巻頭言「読書の秋」に物語を読む—想像力と平和について—と題して、清水奈名子先生（宇都宮大学国際学部教授）の寄稿が掲載されました。
2. 下野新聞（令和6年10月20日）3面に、「とちぎ夜間中学 間口広く」と題して、「金曜午後に昼の部追加」の内容で片桐雅義先生（宇都宮大学名誉教授）らの記事が掲載されました。
3. 下野新聞（令和6年7月4日）20面に、「マイボトルでエコな街」「水先案内人 Refill うつのみや」「給水スポットを公開」と題して、高橋若菜先生（宇都宮大学国際学部教授）らの記事が掲載されました。
4. 下野新聞（令和6年10月21日）26面に、「前を向いて学びを」「栃木 自主夜間中学が開校」と題して、「県内3校目、60人祝う」「外国人、不登校・・・誰でも、いつでも」の内容で「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」の田巻松雄先生（宇都宮大学名誉教授）らの記事が掲載されました。
5. 下野新聞（令和6年11月15日）9面に、下野新聞 votematch「Smatch(すまっち) 衆院選1814人利用」コーナーで「当事者性の違いを反映」と題して、中村祐司先生（宇都宮大学地域デザイン科学部教授）の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. まちびあ No.50 夏号（令和6年7月）7頁に、「まちづくりリレーコラム vol.22」として「楽しみながらつながり合って地域をつくる」と題して、岩井俊宗さん（国際学部国際社会学 科第13期生）の記事が掲載されました。

◎ 新刊案内

1. 国際学部設置30周年記念事業の一環として『国際学部30年の歩み』が刊行されました。[関連資料 | 国際学部について | 宇都宮大学 国際学部](#)
2. 宇都宮大学国際学部編『国際学の扉を開く』下野新聞社 2024年9月27日
3. 清水奈名子・藤井広重編『探求の国際学—複合危機から学際的な研究を考える』ナカニシヤ出版 2024年10月20日

◎ 着任教員紹介その29

氏名(英文): 杉野知恵 (SUGINO Chie)

専門: 国際教育

前職: 外務省職員、駒沢女子大学教員

趣味: パレスチナ刺繍 (Tatreez)、着物

自己紹介: (400字以内)

はじめまして！2024年4月から留学生・国際交流センターに着任しました。高校まで過ごした宇都宮に縁あって戻って帰ることができ、とても嬉しいです。20年弱勤務した外務省では、バングラデシュ、米国（シカゴ）、ヨルダン、スーダンの在外公館で国際協力や広報文化などを、外務本省の無償資金協力課、国別開発協力第一課、北米第二課、中国・モンゴル第二課などで国際協力や経済外交を担当してきました。その後、大学進学時に目指していた教育の仕事に関わりたという気持ちだけで(研究者としてのバックグラウンドもないまま！)大学教員に転じました。外務省での経験を活かしながら、学生の国際理解や視野を広げることにも少しでも貢献できたらと思っています。

研究については、英国の新しい大学の国際化をテーマに博士論文に取り組んでいくところです。今後、宇都宮大学の国際化や国際共修の推進に研究成果を還元していきたいです。よろしくお願いいたします。

(2024年5月11日原稿受理)

◎ 着任教員紹介その30

氏名(英文): 梁鎮輝 (RYO Chinki)

専門: 日中比較思想

前職: 明德義塾高等学校教諭

趣味: 読書、映画鑑賞

自己紹介: (400字以内)

宇都宮大学大学院国際学研究科(中国文化論ゼミ)に7年間所属し、2017年に修士号、2020年に博士号を無事に取得することができました。その間、同窓会の方々を含め、多くの大学教員、関係者にたいへんお世話になりました。感謝しています。その後、高知県の山奥にある明德義塾高等学校に教諭として就職し、日本人高校生に中国語を教えていました。今年10月より、国際学部にて助教として着任することが決まり、中国語や中国文化論などの授業を担当する予定です。長く生活した分、環境は慣れているものの、大学での業務などは心細いところが多々あります。初心を忘れずにいつまでも真摯に謙虚に頑張っていきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

(2024年10月07日原稿受理)

特別寄稿

「宇都宮大学国際学部創設 30 周年に寄せて」

国際学部長 中村真

宇都宮大学国際学部は、2024年、本年10月に設置30周年を迎えました。記念シンポジウムを10月12日に開催し、吉葉恭行同窓会長と同窓会役員をはじめとした卒業生と在学生、また、池田宰宇都宮大学長をはじめとした大学関係者に国際学部教職員をあわせて70名あまり、さらに、オンラインでは10名あまりの参加を得て、盛大に実施することができました。記念シンポジウムとして、まず、学部長による基調講演において、学部設置前後からの30年を振り返るとともに、国際学部の現状と今後への期待について報告がありました。続いて、卒業生、在学生がパネリストとして参加し、国際学部での学びをテーマにシンポジウムが行われました。国際学部での学びの特徴と意義を、参加者一人一人に、熱く語っていただきました。後日、学内のある出席者から、参加者の語りの熱量が高く、たいへん印象的であったというコメントをいただきました。

このシンポジウムとともに、30周年の記念事業として、卒業生12名にインタビューを実施し、その一部を動画にして配信しています。国際学部ホームページの30周年記念サイトに公開されていますので、是非ご確認ください

(<https://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/30th/interview-30th.html>)。この動画を見ますと、まさに国際学部を体現するように、さまざまな背景をもつ卒業生が、これまでのキャリアにおいて、国際学部での学びがいかに重要であったかについて生き活きと語っています。この動画は、国際学部のこれまでの教育の成果を示す何よりの証拠であり、今後もこれまでの教育方針を大切にして人材育成を進めていくことの重要性を認識する機会になりました。

30周年を記念して、2冊の書籍出版も企画しました。国際学部の教育研究活動を社会に発信することを目的に、一般読者向けの新書『国際学の扉を開く』（下野新聞社）と、学術書『探求の国際学—複合危機から学際的な研究を考える』（ナカニシヤ書店）を発行しました。これらの書籍の準備にあたっては、全教員が参加する研究会を毎月開催し、それぞれが担当章の構成案を発表し、意見交換を行いました。同じ学部に所属していても、教員は個別に研究を進めていることが多いため、この研究会は、同僚が進めている研究の面白さを知り、相互に触発されるとともに、国際学部の研究の多様性を再確認する良い機会になりました。

さらに、もう一つの企画は、30周年を振り返る記念誌の発行です。今回は、20周年記念誌以降の活動を中心に振り返っておりますので、とくに近年の教育研究活動をご確認いただくことができます。こちらも、30周年記念サイトで公表していますので、是非ご覧ください。

これらの記念事業を進めるにあたりましては、同窓会のみなさんをはじめ、卒業生、多くの関係の皆様にご寄附をはじめさまざまなご支援をいただきました。あらためて、心

より感謝を申し上げます。重ねて、同窓会からは、年度ごとに、国際学部生の国際的実践力養成のための教育支援をいただいています。この機会に、重ねてお礼を申し上げます。なお、これらの30周年記念事業のために、2年前に準備WGを設置しました。3名のWGメンバー、清水奈名子、出羽尚、立花有希教員を中心に、準備を進めていただきました。無事に実施し、完成できたことはWGのリーダーシップと関係教員の協力、尽力のおかげです。

少しだけ自分に関わることをお話ししますと、私は、国際学部設置以来30年以上にわたり在職している最後の教員になりました。この30年間、1年生を対象にした学部必修科目を担当してきましたので、1期生から今年入学した在生まで、3000名を超えるほとんどすべての入学者が、私の授業を受講されたこととなります。振り返りますと短くも感じますが、1期生のみなさんの場合、最も若い人でも50歳台を目前にしている年齢になるのだと考えると、さすがに30年はそれなりに長い歳月であるということでしょう。私自身は、自らの在職期間を振り返ることはこれまであまりなかったのですが、この度の30周年を機に少し考えました。それは、担当してきた「異文化間コミュニケーション」(1学科体制への改組の際に、多文化共生コアBという冠がつけました)を、30年前、20年前、10年前に受講されたみなさんは、それぞれどのような印象をもたれたでしょうか、また、近年受講した在生と比較するとどうだろうか、といったことです。これからの国際学部の展開を考える手がかりにもなりますので、私の授業に限らず、国際学部の教育研究へのコメントをお寄せいただければ幸いです。

30周年記念事業は、これまでの国際学部の教育研究、社会貢献活動の歩みを振り返る機会になるとともに、社会との共創を見据えた今後の新しい方向性を考えるよい機会にもなりました。国際学部がさらに充実した教育研究を展開していくためにも、引き続きみなさまのご支援をお願いして、本稿のまとめとしたいと思います。

(2024年12月5日原稿受理)

研究室訪問 61 第9号から国際学研究科に関する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「エトノスを持たない「民族」を対象として人類学する私」

リーペレス ファビオ

私は、メキシコ国籍の母と韓国籍の父との間に韓国で生まれ、生後1年後父と離婚した母と共に、多くの国々を転々と移動を繰り返しながら育ってきました。詳しく説明すると、母はメキシコ外交官を務めていたので、移動が多かったのです。母が25歳の時から、中国、韓国、日本、マレーシア、韓国へと移動し、その間30年は一度も本省に戻ることはありません

せんでした。2年ほどメキシコ本省で勤めた後、カナダへ行き、カナダでは10年ほど勤めました。今は退職し、趣味の旅行を楽しんでいます。

私は、韓国で生まれた1年後に、母と共に日本へ移住し東京で7年過ごしました。9歳を迎える年にはマレーシアのクアラルンプールへ移住し4年過ごしました。13歳の誕生日の後に再び韓国のソウルへ移住し5年過ごしました。こうした複雑な移動の経験の中で、私は日本で教育を受け、マレーシアと韓国では日本人学校に通い義務教育を終えました。中学を卒業した後は、ソウルのインターナショナルスクールに入学し、英語を中心とした教育を受けました。大学は、カリフォルニア州のコミュニティーカレッジに通った後に、ウィスコンシン州大学オークレア校に編入し、2006年に卒業しました。カリフォルニア州ロサンゼルスに滞在していた間は、『ブレード2』という映画のプレミアに招待され、パーカーとジーンズとサンダル姿で招待していただいたカクテルドレスを着たレポーターの方と一緒にレッドカーペットを歩いたことがあります。オークレアでは、白人警官に拳銃を向けられたことがあります。大学卒業後は、就職活動もせず、奨学金（返済のいない奨学金）の残りとおアルバイトの貯金で、日本へ旅行しました。3ヶ月後には、旅行ビザが切れ、メキシコに移住することになりました。メキシコに滞在した3年間は、日本語教師、英語の家庭教師、運転手、売店員やミュージシャンのように職を転々としていました。安定した職につくことができず、自分の居場所を見失っていたので、母が当時滞在していたカナダへ行くことにしました。カナダでは、図書館で本を読みながら、2年ほど過ごしていました。中心的に読んでいたのは、主に、エスノグラフィー（民族誌）でした。民族誌というのは、文化人類学者が、長期間のフィールドワーク調査に基づいて、ある特定の社会で生活する人々の生き方を細かに描いたものです。特定の社会に定住せず、転々と移住し続ける人々の生き方を描いてみようと思い、民族誌を書くことに魅了され、大学院へ進学することを決心しました。2013年に大学院進学のため日本に再び移住し、学位を得て、今に至っています。

さて、私の移動の経歴と遍歴を簡単にまとめてみました。生まれてから今日まで、次から次へと目的を変えながら移動を続けている様子が見えてきます。そこには、私を既存の「〇〇人」と定義づける、出自、教育、信仰、言語、民族、集団、地域というものはありません。自分と同じ境遇を共有する人と出会ったことがないので、帰属意識やアイデンティティも持ち合わせていません。

実は、グローバル化によって、人の移動が広域化し多様化した現代では、私のように連続的な移動を繰り返しながら育つ人々が増えてきています。たとえば、コロンビア人の父と韓国人の母が留学先の日本で出会い結婚し、カナダへ移住し、カナダ国籍の子を産み、コロンビアに移住した後に、韓国、そして中国に移住しました。この家庭では、両親は日本語、父と子はスペイン語で、母と子は韓国語で会話をしています。子は、コロンビアで小学校の教育を受け、中学校からは中国の学校で教育を受け、4ヶ国語が話せています。彼女のその後の移動の行き先はまだわかりません。次に、スウェーデン人の父と日本人の

母との間に日本で生まれ方の例を見てみましょう。彼女は、9歳の頃にスウェーデンへ移住し、16歳の頃に再び日本へ移住しました。大学はカナダへ行き、卒業後は、グアテマラへ語学留学、イタリアへ資格獲得のため留学しました。就職は、香港。現在は再びスウェーデンに移住し学校の教員を務めています。

このように、特定の地域や出自、言語、教育、集団に結びつけることができない、強いと言えばエトノス(ethnos)で定義付けすることができない人々が増えています。社会や文化が流動化した産物の新たなストレンジャー(stranger)でしょうか。ですが、このような人々は、「連続的な国際移動」という経験を共有する新しい「民族」だともいえるでしょう。

私は、幼少期から連続的な国際移動を繰り返し育った人々を対象として、彼ら/彼女らが移住先で形成する社会関係とりわけ友人関係に着目し、彼ら/彼女らの生き方の理解を試みています。研究方法は、フィールドワークとライフストーリーです。

2022年10月に宇都宮大学に着任して、「文化人類学」「民族誌学」「スペイン語基礎」「スペイン語購読」の授業を担当しています。昨年度からゼミ生を持つ様になり、今年は私の元で2人の卒業予定者がいます。今年は8名が入り、内2人はマレーシアとタイへ留学し、内1人は来年度からカナダへ留学し、5名が卒論研究の構想をたてています。文化人類学がモットーとする、他者の姿を鏡として自己の姿を振り返り、日常の当たり前を根本から問い直す自省を伴う教養を少しずつ体得していく学生の姿を見ることで、私も少しずつ教員として、人類学者としての自分の姿を振り返っている今日この頃です。

(2024年11月20日原稿受理)

博士録 65 第22号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

知究人 37 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 35 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「Pay it Forward —アメリカ版恩送り」

岩永 健吾

私は現在、アメリカ合衆国南東にあるカリフォルニア州サンディエゴに住んでいます。ここは、メキシコと国境を接し、アメリカ最大規模の海軍の基地がある街でもあります。大リーグの「サンディエゴ・パドレス」の本拠地であり、ダルビッシュ有や松井裕樹も所属しています。大谷翔平が来た対ドジャース戦はこちらでも話題になっていました。私は縁あって今はこちらのバイリンガルスクールで小学生を相手に日本語で国語や算数を教えています。

さて、英語では Pay it Forward という表現があります。日本語では「恩送り」ともいわれますが、誰かにもらった恩を他の誰かに送っていく、ということです。個人主義といわれるアメリカでは人付き合いがもっとドライな印象があったのですが、つい最近この Pay it Forward を感じさせられる体験を二つしました。

一つは、近所のスーパーでビールを買おうとレジに並んでいたときのこと。ディスカウントの表示につられビールケースをレジに持って行ったのはいいものの、お店のアプリで表示されるクーポンがないと割引になりません、と言われてしまいました。しょうがないなあ、とあきらめたその時、私の後ろに並んでいた見知らぬ男性が、私は使わないからどうぞこのクーポンを使ってと、スマホを差し出してくれました。私はその時、そのタイムリーで自然な所作に感動していたのですが、その男性も、レジの方もごく普通の表情だったことがとても印象的でした。

もう一つは、ダウンタウンにクラシックのコンサートを聴きにいったときのことで。当日急に行くことを思いついたため、チケットは窓口で買えばいいやと会場へ向かいました。駐車場探しに手間取り、開演 10 分ほど前に会場に着き、窓口で聞いたところ、まだ席はあるとのこと。では一番安いバルコニーの席をお願いしますというと、窓口の女性はほんのわずか考えたあとで、脇に 1 枚置いてあったチケットから付箋をはがしながら、どうぞ、無料です。誰かがドネーションしてくれたチケットです。とそれを渡してくれました。ステージに近く、演奏者の呼吸まで感じられるとても良い席でした。あとで公演のパンフレットを見ると、寄付者の名前がずらり。きっとこの中の誰かからチケットを譲ってもらったんだなと大変感動しました。

アメリカに来てまだ半年あまり。まだまだ慣れない海外生活ですが、このようにちょっとした「恩送り」を受けるとうれしくなります。いつかは私も恩を「送れる」ように、健康に気を付けてこれからの海外生活を送ってきたいと考えています。

国際学研究科国際社会研究専攻 第 5 期修了生)

(2024 年 12 月 2 日原稿受理)

海外留学今昔 32 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 23 知求会ニュース第 41 号より現役学部生・院生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2024年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）

「栃木から東京をみるということ」

中央大学法学部助教

森谷 亮太

震災経験と大学院進学

私が宇都宮大学国際学研究科博士前期課程に入学したのは2011年の春のことで、国際学部棟にはまだ東日本大震災の傷が生々しく残っていた。指導教官となるライマン先生の研究室を訪ねると、倒れた本棚でドアが開かず、部屋の中は散乱していたことを覚えている。私が国際学研究科への進学を希望したのは、学部時代の親友に宇都宮大学を勧められたことが大きかった。私に宇都宮大学大学院を進めた親友は、3月11日の震災時に留学準備のため彼の実家のある岩手県陸前高田市に帰省中で、津波に遭遇し命を落とした。彼とは、ちょうど亡くなる2週間前に大学近くのファミリーレストランで昼食を食べたのが最後の思い出になるなど、当時は思いもよらなかった。おそらくあの震災経験したすべての人たちと同じように、私の宇都宮大学大学院生としてのスタートは、あまり明るい雰囲気を感じるものではなかったが、親友の遺言のようになってしまった宇都宮大学への進学は、とにかく全力で学ぼうという決意を私に植え付けた。

二足の草鞋

大学院の授業が始まると、授業や研究と並行して、陸前高田市で暮らしていた親友の実家へ通うようになった。現地では震災と津波の経験や、政府の対応、生活再建などを見聞きする機会があり、次第に陸前高田市の復興の力になりたいと思うようになった。大学院での研究活動と並行して、陸前高田市で仲間と協力して任意団体を立ち上げ、映画の上映会や、体験イベントを企画し、生活の潤いになる娯楽を提供するボランティア活動を行った。この時期の研究とフィールドでの実践という2足の草鞋は、人間や社会の仕組みを考える上で相乗効果があったと感じている。博士課程では、引き続きライマン先生から継続的なサポートも受けつつ、新たな指導教官として威先生に師事し、2020年3月に博士後期課程を修了することができた。国際学研究科には9年間在籍したが、この期間に経験したことが、今の大学教員生活の基礎になっていると感じている。

都心で青空授業を試みる

博士課程修了後初めて着任した小樽商科大学で2年間教員を務めた後、2022年4月より現職の中央大学法学部に助教として着任した。以前宇都宮大学で非常勤講師をしていた妻も栃木での暮らしが気に入っていたので、関東に新居を探す際には、栃木に暮らして東京に通勤するという生活は私たち家族にとっては自然な選択だった。中央大学法学部では、英語教員としての授業のみならず、専門である障害学の1年次演習を指導する機会をもらうなど、教員としても研究者としても充実した時間を過ごせている。また、中央大学にはボランティアセンターという組織があり、認定団体が宮城県の気仙沼で学習支援ボランティアを長年続けている伝統がある。私も、今年度は顧問として関わることになり、陸前高田市での活動が気仙沼での活動にも繋がり、嬉しく感じている。今でも、国際学研究科でご指導いただいた先生方には、継続的に交流、共同研究や、学会や研究会でお会いしたりする方がおり、宇都宮大学で本当に良い出会いに恵まれたと日々感謝している。

勤務先の都心キャンパス（茗荷谷）では、周りに緑があるところが非常に限られており、唯一建物5階のルーフトップガーデンが緑に触れることができる場所となっている。解剖学者の養老孟司は、都市と田舎の環境を比較し、都市を人間の不要なものを排除した脳化社会であると定義（『脳化社会』、筑摩書房、2024年）した。予測不能な自然的な環境（例えば、風や鳥や虫の声、暑さ寒さ、土の感触や匂いなど）が欠けている都市では、生活する人々が自然欠乏症になっていると指摘した。2年間生活した小樽では、道路は舗装されていたが春先には寒暖差で収縮して穴ボコだらけになることや、冬の時期に自然の厳しさを感じる経験が多くあった。一方で、東京の都心では、自然の厳しさを感じる機会も少なく、特に法学部の新キャンパスでは全館空調で1年中快適な温度に保たれており、窓を開けなければ季節さえ関係なくなってしまう人工的環境が整備されている。しかし、養老の指摘するように、教育の場では身体感覚を磨くことも、また学びのカタチではないだろうか。そのように考え、今年度は学期中に天気の良いタイミングでルーフトップガーデンに出て青空授業を行うという取り組みをした。これが意外と受講生には好評で、英語の授業なのに自然や虫の話をしている変な授業というお褒め（お叱り？）の言葉までいただいた。

写真あり 写真は国際学部同窓会 HP のコミュニティ広場に掲載されています。

栃木から東京をみるということ

私が宇都宮大学で得た視点は、東京という大都市との距離感だと感じている。都市との程よい距離感は、私に、都市という脳化社会を、田舎の身体感覚が残る社会から見るができる視点を育てたと感じている。このような視点としての距離感は、私の専門とする障害学における健全身体を批判的分析的にみる視点にもつながるところがあると考え。障害学は、「ふつう」「健全」「できること」とは何かを私に問い続けるが、それはマジョリティの側であることを忘れがちな研究者である私を、障害当事者の側の視点から、無批

判に素通りしてしまう「ふつう」の日常や社会基準、文化、価値観を問い直すことを要求しているのだろう。少し距離を置いてみると見えてくるものがあることを、私は栃木の暮らしから東京を見ることで、気がつけたのだと思う。

(国際学研究科博士後期課程国際学研究専攻 第8期修了生・
国際学研究科国際交流研究専攻 第8期修了生)

(2024年10月23日原稿受理)

「伊藤ゼミ懇親会開催」

古屋敷幹

1997年国際社会学科入学の3期生、古屋敷幹（こやしきみき）と申します。私は学部、大学院（修士課程）通して伊藤一彦先生の研究室に所属し、現代中国について学びました。当時伊藤研究室は中国人の留学生が非常に多く、私の同期に関しては私以外全員中国人という状況で、さらに修士課程の1年間は中国上海の復旦大学に留学したため、まさに中国漬けの大学・大学院生活を送っていました。そして、伊藤先生のご指導のおかげで無事修士課程を修了した後は日本企業の上海支店で働き始め、2、3年で帰るつもりがうっかり？上海人と結婚してしまい、そのうち子供も生まれ、仕事と子育てでバタバタと暮らしているうちに22年も上海にいたことになったのでした。つまり、私にとって伊藤先生との出会いが人生最大の岐路だったと言っても過言ではないのです。そしてそれは私だけではなく、伊藤先生との出会いで人生が大きく変わった先輩や同期、後輩がたくさんいます。その一部の声をお届けします。

2003年修士課程修了、葉麗さん

私は2003年に伊藤先生の研究室で卒業した中国からの留学生ヨウと申します。ふっと振り返ってみると大学院を修了してもう21年の歳月が経ちましたー！自分もびっくりしました。上智大学の大学院研究生として1年を勉強した後、同じ大学の大学院に進学するつもりもなく（私立のため学費が高くともじゃないですが、経済的に両親が負担できるほどのものではないため）、進路について悩んだ末、当時インターネットはまだそれほど普及したほどではない時代に、偶然中国研究の専門家—伊藤先生のところに辿り着きました。それから先生のご指導の下、無事に大学院を修了し、大手メーカーにも就職ができ、それからは転職も経験して、今は思いもよらなかった大学院で書いた研究論文に関わるセメント業界と関わる商社で勤めています。修了してから、21年経った今もこうやって宇大時代の同窓や後輩たちと集まっていつも微笑んでいる伊藤先生を囲みながら、歓談できた事はなによりも幸せなものです！次回もみなさんにお会いできること、楽しみにしています！それでは、みんな元気でね！

2004年修士課程修了、柳慶花さん

伊藤先生のおかげで、私たちは幸せにつながれたと思っています。伊藤ゼミに入ったことで、かけがえのない友を得ることができました。一生の財産です！

伊藤先生のおかげで今がある、と言っても過言ではない私たちは、修了から20年以上たった今でもしばしば伊藤先生を囲んで楽しい時を過ごしています。伊藤先生、長きにわたって私たちを教え導き、見守り続けてくださりありがとうございます！！いつまでもお元気で、おいしく楽しくお酒をご一緒しましょう！

写真あり 写真は国際学部同窓会 HP のコミュニティ広場に掲載されています。

2024年8月某日、伊藤先生を囲んで東北菜を楽しみました！

(国際学研究科修士課程国際社会研究専攻 第3期修了生・
国際学部国際社会学科 第3期卒業生)

(2024年12月6日原稿受理)

特別寄稿 国際学部同窓会より

「国際学部創設30周年を祝して」

宇都宮大学国際学部同窓会会長 吉葉恭行

国際学部創設30周年おめでとうございます。同窓会を代表してお祝いを申し上げます。

1994年に宇都宮大学国際学部が創設され、翌1995年4月に私を含む第一期生が入学しました。創設期の国際学部の様子や過ごした日々はいまでも鮮明に思い出されますので、国際学部が創設30年を迎えたという事実戸惑いを禁じえません。しかしながら、今日、久しく会わなかった同窓生や恩師のみなさまにお会いしてみると、それぞれが30年間を過ごしてきたのだなと実感しています。

ここで宇都宮大学国際学部と私にまつわる最初期のエピソードとして、私が社会人選抜入試に挑んだ1994年11月16日の出来事を紹介いたします。英語と小論文の筆記試験を終えて面接に臨んだところ、某先生から令和の時代ではハラスメントとの指摘を受けそうな質問を投げかけられました。あとから思えば働き盛りで受験する私を心配しての質問であったと理解しましたが、それに対して血気盛んな年ごろであった私は逆切れ気味の受け答えをしてしまいました。面接後にこれで落ちたかなと少し後悔しましたが、12月1日の合格発表では合格者として名前が下野新聞に掲載されたので嬉しく思いました(当時は合格者が下野新聞に掲載されたのです)。「気骨はあるようだ」ということで入学が認められたようです。私の国際学部との縁は、このような昭和な雰囲気が漂う平成6年のエピソードからはじまったのです。

もう少しアカデミックでまじめなエピソードを紹介すればよかったかもしれませんが、このあとの記念シンポジウムでは卒業生と在学生によるパネルディスカッションがありますので、パネリストのみなさんから国際学部で学んだことや得られた経験など様々なエピソードが披露されるものと思います。そしてそれらを通して、これまで宇都宮大学国際学部が果たしてきた役割や存在意義、そして今後のあり方がみえてくるものと思います。

最後に同窓会の話になり恐縮ですが、国際学部同窓会は、「会員相互の親睦と資質の向上を図るとともに、母校の発展に寄与することを」(会則第3条)を目的として、1999年3月24日の国際学部第一期生の卒業と同時に創設されました。その後の同窓会の維持や事業継続に困難を伴う時期もありましたが、本年3月に創設25年を迎えてようやく同窓会らし

い雰囲気になってきたなと感じています。この間 2011 年の東日本大震災や 2020 年からの新型コロナウイルスのまん延など苦難の時を過ごす時期もありましたが、その時々国際学部在校生に必要な支援事業を実施して参りました。

これからも同窓生間および同窓生と在校生の絆を結ぶハブとなることを目指し、また微力ではありますが母校である宇都宮大学と国際学部の発展のお手伝いをしたいと考えています。同窓生のみならず、国際学部をはじめ宇都宮大学教職員のみならずのご協力とご支援をお願いいたします。

今後の宇都宮大学国際学部の益々のご発展を祈念して国際学部創設 30 周年のお祝いとさせていただきます。

付記：本稿は記念シンポジウムの「来賓あいさつ」に加筆作成したものです。

(2024 年 12 月 6 日原稿受理)

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん（国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019 年 4 月から、年 4 回から年 2 回発行（4 月 1 日、9 月 1 日）の変更になりました。

EU 支部だより

知求会ニュース第 38 号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 52 号の内容は、1. イタリア エアビターの「セルフチェックイン」禁止に、テロ対策で CNN.co.jp 2. EU 支部だより クリスマスです。

編集者のひとりごと

●今号は 10 月 12 日に開催された「宇都宮大学国際学部設置 30 周年記念シンポジウム」に関連して、中村真国際学部長と吉葉恭行国際学部同窓会会長のお二人に、お忙しい中、特別寄稿をお願いしました。その結果、内容の充実した知求会ニュース第 92 号になりました。

さて、知求会ニュースも、無事 23 年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。chikyukai@gmail.com

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会